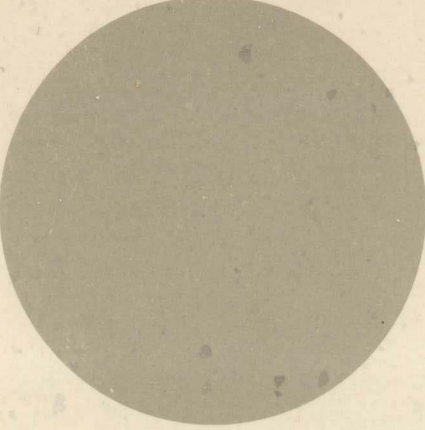




Cloudy : Hitonari Tsuji





クラウディ

辻仁成

Cloudy : Hitonari Tsuji

初出誌「すばる」1990年5月号

クラウディ

一九九〇年六月一〇日 第一刷発行

一九九〇年六月三〇日 第二刷発行

著者 辻 仁成

装丁 大木 裕

発行者 若菜 正

発行所 饅集英社

二二一五 東京都千代田区一ツ橋二一九一〇

編集部 (〇三)二三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三)二三〇一六三九三

製作課 (〇三)二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

ク
ラ
ウ
デ
イ

不覚にも僕は今年、三十歳を迎えようとしている。死を決意し、高校の屋上の高いフェンスによじ登った、十六歳のあの瞬間には、都会の片隅で、連夜嘔吐しているこの無様な今の自分の姿を、想像することは到底できなかっただろう。一九七六年、九月六日のあの瞬間、眼下に広がる俯瞰の函館の市街を、僕は二つの網膜に焼き付けようとしていた。函館山の裾の切りたった斜面に建てられた母校は、砂州の上に続く市街を一望することができた。潮の香りを乗せた、まだ少し夏を残している生ぬるい秋風が僕の頬に触れる。

臥牛山がきゅうと呼ばれる函館山を背に、僕は三メートルほどのフェンスの一番上に一気に足を掛け、ぐいと体を前へ押し出した。ちょうど真下を石敷きの坂道が、まっすぐ函館港

までのびているのが見える。古いレンガ造りの倉庫やロシア正教会が建ち並び、右手に十字街、左手に函館ドック、そして湾に浮かぶ青函連絡船と、次々に視界に思い出の景観が飛び込んできた。それは、観光地函館にふさわしい景色だった。昼も過ぎていて、太陽は高く、晴々しい牧歌的などかな気候は、自殺をするにはあまりベストの状態じゃなかったかもしれない。しかし、僕を厭世的にさせた最大の理由が、そののどかさにあったことを、親も担任も精神科の医者も、結局ずっと気づくことはなかった。そう、まさに僕はこの不景気なくせにのどかな、釈然としない、田舎町に絶望していたのだ。一生この小さな街で、親父の後を継いで、ドックに身をうずめる自分の不運に見切りをつけようとしていたのかもしれない。重油で汚れ、バーナーをにぎり、リベリア船籍のタンカーなんか、作りたくはなかったのだ。

僕はもう片方の足を、ゆっくりとフェンスにかけて、ぐらつく不安定な平均台の上に腰を降ろした。風が少し吹くと、僕も揺れた。僕は浮遊感を味わいながら、太陽に手のひらをすかしてみた。指の隙間から光りが、キラキラこぼれてくるのが見える。僕はバランスをとりながら、深く、深く、やさしい空気を、まだきれいな肺の奥に吸い込んだ。

その時の僕は、もう自分の意志では戻ることができない所まで来ていたと思う。

連絡船の低い汽笛が響き、僕を誰かが呼んでいる気がして、一瞬、ちらっと振り返ると、屋上の入口に女生徒が立ちつくしていて、驚いた顔で僕の方を見上げているのが見えた。彼女が僕の最後の目撃者になるはずだった。僕は、ヒーローにでもなったような愉快な気分になり、笑いながら、両手を少しずつ広げて左右にのばしてみた。鳥のはばたく真似をしていると、本当の鳥になったような気がした。フェンスの鳴る音と、風のすれ合う音が、僕の気持ちを上空へ持ち上げる。僕にははつきりと、生える白い翼が見えていた。生まれ変わるなら鳥にして欲しいと、大空に頼んで、ひっかけていたつま先をはずし、踵でフェンスを蹴り上げようとした。ギイというフェンスの軋む音がして、僕の腰は少し宙に浮いた。女の子の悲鳴が聞こえ、僕は遮るもののない函館の頂点に立った。

しかし、僕の体が大地と垂直になった次の瞬間、正面の碧空に、突如黒い影が現われた。影はみるみるうちに速度を増し、膨張し、ものすごい勢いで僕の頭上を掠めた。バリバリと大気の破れる音が、あたりを包み、大地が震え、太陽が遮られた。金属的に輝

くその巨大な黒い影に煽られ、バランスを失った僕は、空気を掻きながら、屋上に落っこちてしまった。

落下する瞬間、僕の目を射たものは、鷲の羽のような巨大な翼と、赤い星のマークだった。

その大きな黒い影が、日本に亡命してきたソビエトの戦闘機ミグ25だとわかったのは、その日の夕方、病院に駆けつけた弟の情報からだった。落下した時、頭を強く打ち、足の骨を折ったらしく、両足を白いギブスで固定されていた。駆けよった女生徒に起こされて、函館の上空を低空で旋回するミグを見上げる、その時の僕の心の中で、死に向かう心は、とつくに消え失せていた。戦争でも始まったんだろうかという好奇心が、僕の命をつなぎとめてしまったのだ。

その日、九月六日。ミグ25に乗ってきた、ソビエト・サカロフカ空軍基地所属のビクトル・イワノヴィッチ・ペレンコ空軍中尉は、みごと日本に亡命することに成功し、僕は死ぬことに失敗した。彼とのこの間接的な出会いは、その後今日まで、僕に多大な影

響を与え続けることになる。奇しくも彼が飛来してきた時、今の僕の年齢の二十九歳だったこともつけ加えておかなくてはならない。そして僕は今年、十月で三十歳を迎えようとしている。

2

頭の奥深くに密林があつて、今日も打楽器が鳴り響いている。僕はつたに足をとられ、洋シダが生い茂る湿原に倒れ込んだ。もがけばもがくほど、つたは全身にからまり、僕を動けなくさせた。首だけがかろうじてコールドールの海の上に浮かんでいて、濁った空気を吸いこむことができた。僕は小さな水槽で飼われている大きな真鯉のように、口をパクパクさせていた。しばらくすると、そこに七色の触角を持ったバッタが次々に現われ、僕の顔めがけて飛び移ってきた。バッタ達のギザギザの手足が、顔の皮膚にちく

ちくと食い込む。僕は、我慢できずに口を開け、悲鳴を上げるが、密林は深く、僕の声はすぐに死んで化石になってしまう。気がふれる少し手前で、僕は口の中に飛び込んできたバッタを噛みちぎってしまった。

幻は、昨夜眠れずに飲み干したウォッカの残留アルコールのせいに違いない。口からこぼれそうな唾液をすばやく吸い込んで、爪先に力を入れてバランスをとった。地下鉄は、仕事へ向かうサラリーマンやＯＬで満杯になっていて、僕はまったく身動きがとれないまま、車両のほぼ中央でねじ曲がって浮遊している。趣味の悪いパフュームや汗の匂いが、鼻をねじあげる。車体が揺れるたびに、僕は届かないつり輪に手を伸ばし続けている。何かが、頭の内側で、頭蓋骨をポコポコたたく。規則的なリズムは、吐き気をもよおさせた。次の駅で降りなくてはいけないのに、僕は出口からかなり離れた、連結部分のところに来てしまっている。いつもだったら、他人を蹴り上げてでも出口まで進むはずなのに、その日の僕にはなぜかその意欲がまったく起きなかった。連結部分の、不安定なプレートに腰を沈めて、降りなければならぬ駅を飛ばしてしまった。

一つ駅を乗り越してしまうと、後はもうどうでもよかった。二つも三つも四つも五つ

も大差はなかった。どうして今までそんな単純なことに気づかなかったのか、不思議でしやうがなかった。腕時計を見ると、出社の時間をすでに過ぎてしまっていた。

僕は、市ヶ谷の印刷会社に勤めている。印刷会社といっても、従業員が全部で六人ほどの、小さなオフセット印刷の会社だった。写真の専門学校を卒業してから、約十年間、転職することもなく、ずっと働き続けてきた。特に給料がいいというわけでもなく、特に待遇がいいというわけでもないの、今までやめないうできたのが不思議だった。印刷物の大半を占めているのは、流通ルートにのらないような、いわゆる自販機本やビニール本ばかりだった。最初はアルバイトで働いていたのだが、気がつくといつのまにか、正社員になっていた。主任という肩書きではあったけれど、仕事場をまかせられているというだけで、僕その他には、六十歳を過ぎた、製版カメラを担当する老人と、他に数人のアルバイトがいるだけだった。忙しくなると、輪転機の操作から原稿の修整まで、僕が一人で奔走することになった。月末には、締め切りのせまった修整前の製版原稿が、いちどきに固まって持ちこまれ、狭い印刷所はパニックになった。眠れぬ日々が続く、

輪転機は休むことなく回り続けた。股を広げた若い女の子達の写真が、狭い仕事場の中に山積みになっていった。下半身が疼くのを我慢しながら、僕は細かい修整作業を続けていく。これだったら、函館で、青函連絡船の航海士でもやってたほうがましだったかもしれないと、徹夜あけのブラットホームで、この十年間、何度も後悔を繰り返してきた。そして三十歳を目前にして、その遣り場のない苛立ちには、ピークに達しようとしていた。仕事に追われ続けた朝、妻も子供もない、二十九歳の男が、一人、洗面所の鏡の前に立ち、若さを失くした、自分の醜い姿に愕然と肩を落とすのだ。青春は終わろうとしていた。いや、もう気づかないうちに、とっくに終わってしまったのかもしれない。こんなはずじゃなかったと、出血した歯ぐきの血を、鏡に向かって吐きかける朝が続いた。

僕は、溜め息を数度ついてから、ひたいの汗をYシャツの袖でぬぐった。

僕を乗せた地下鉄は終点で乗客を入れ換え、再び今来た道を戻り始めた。戻りの電車はがらがらだった。それでも僕は相変わらず、連結部分から動こうとはしなかった。膝

を曲げ、背中を丸め、首だけ少し突き出して、放心し続けていた。他の乗客には、氣のふれたサラリーマンとしか映らない格好だったはずだ。首から垂れ下がるネクタイは、首吊りに失敗した安物のロープのように、力もなく、僕の膝の間で、電車と一緒に揺れていた。しばらくすると、降りなきゃいけなかった、印刷会社のある駅を再び通ったが、僕は頸を引いて目をそばめ、ただじっと見送るだけだった。

3

渋谷駅の雑踏の中で、いつもより少しだけ歩くピッチを落としてみると、不思議なくらい違った世界が見えてくる。それまでの狭かった視界が広がり、人々の無分別な足どりの全貌がわかりはじめる。どうせ人間なんかさあ、いつかは死ぬじゃない、とか、もう一度やってみるよ、何とかなるかもしれないから、とか、頭にくるよなあ、信じられ

ないよなあなにもかも、などと、会話の断片が耳に飛び込んでくる。あたりが冷静に見えてくればくるほど、自分だけ人生のレースから脱輪したような、さみしい気分に見られる。ゆっくり、ゆっくり、落ち零れた気分を励ましながら、さらにもう少し歩くピッチを落としていくと、そのさみしい孤立感も五分もしないうちに、小高い丘の上からでも人々を見下ろしているような優越感へと変わっていくから不思議だ。

雑踏の流れの予測が付き、交差する人々の航跡が、魚群探知機のレーダーに映った魚影のように網膜に浮かびあがる。すれちがう人々の顔が妙にリアルに目に飛び込んでくる。どこか見おぼえのあるモンゴル系の顔達。おふくろやおやじや、親戚の誰かにそっくりな人達。元は同じたったひとつのDNAから枝分かれしていった人々。数えきれないDNAの組み合わせが、そっくりだけどどこか違う人間の表情を作りあげている。僕はいつしか立ち止まり、飽きのこないロードショウを傍観してしまふ。

月曜日。正午を告げるサイレンが、街中に鳴り響く頃、僕はナビの住むワンルームマンションに辿り着いた。渋谷の道玄坂を上がりきった所にある彼女のマンションは、東

京での僕の唯一の避難場所になっている。そう、たったひとつの避難場所。仕事に追われ、人間関係にもまれ、呼吸が苦しくなると、僕の足はいつも勝手にナビのマンションを目指すのだ。彼女は逃げ込んでくる僕を、きまって笑顔で優しく迎え入れてくれる。熱い紅茶とクッキーを出してくれるし、話を真剣に聞いてくれるのだ。

「ベレンコのように亡命者になりたい。」

僕はそんな彼女に、もう何百回と同じことを言いつづけ、ナビはそのたびに、素敵ね、と微笑み返してくれた。その「素敵ね」というたった一言が、僕をどんなに浮上させてくれたことか？ マシュマロのように柔かく、湯タンポのように温かく、「素敵ね」は僕を励ましてくれたのだ。

上野動物園の飼育係。それが彼女の職業である。動物園の飼育係をガールフレンドに持つと、困ることがひとつある。はじめのうちはあまり気づかなかったのだけれど、それは、オランウータンやゴリラやあるいはマントヒヒのオス達と同じように、ただのオスとして扱われるということだった。

「はい、イイコイイコ、残さずに全部食べなきゃだめよ……」

彼女はセックスを交尾と呼び、女をメス、男をオスといい、腰を激しく振る行為をラスト運動と呼んでいた。抱きあっている最中に、僕の尾骶骨の辺りをまさぐっては、歴史上の発見でもしたかのごとくに、突然大声をはり上げたりした。

「すごい。あなたの尾椎は発生学的に価値があるわよ。こんな大きなヒトの尾椎を見たのは生まれてはじめて。興奮しちゃうわ。」

彼女が僕の体のあちこちで、同じような発見をくりかえすたびに、交尾は中断され、僕のペニスは一時的な不能に陥ったのだ。

「ボルネオ中部から来たオランウータンの交尾は、木の枝にぶらさがったまま互いに向き合ってやるのよ。すごいでしょう。ねえ、よかったら、ちょっとためしてみない？」

彼女はそう言って、その行為が人間でも可能かどうかをまじめに試そうとしたのだ。

僕らは裸になって窓の棧さんにぶらさがり、何度か挑戦してみたのだが、結局つがい結合にまで至ることはなかった。彼女は、やっぱりだめか？と呟いて、机の上のノートに何かを書き込んでいた。